

アルコール依存症患者を対象としたグループワークに関する研究 ～都内アルコール専門外来病院の参与観察から～

A96-4438 舟森 忍 指導教官 朝倉 隆司

1. 目的

本研究の目的は、多くを心の問題とするアルコール依存症患者において、現在どのような治療法があり、どのような生活をして社会に復帰しようとしているのかを、都内アルコール専門外来病院における参与観察から検討し、この病気についての理解を深め、その背景にある人間関係のあり方について考察する。

2. 研究方法

本研究では都内アルコール専門外来病院において約1か月の観察を行い、病院内でのアルコール依存症患者の生活や治療方法、スタッフとの関係などの実際から参考文献をもとにフィールドワーク形式で自分なりに考察した。

3. 観察の結果と考察

なぜ今クリニックのような専門機関が求められているのかということについてまず考えてみたい。厚生省監修の『アルコール白書』(平成5年)によると、近年、アルコール依存症患者数が増加しているとともに、その年齢層も幅広くなっており、女性や、合併症を持った患者も増加している。さらに、患者の多くは様々の家庭内問題や身体的症状を抱えながら日々生活し、家族や周囲の人々を巻き込み、コントロールしつつ問題飲酒を正当化する。幅広い対象者の心理社会的問題へは、集団精神療法の他に個人への対応が必要となってくるからである。

クリニックでの治療は素面の状態で同じ病気の仲間と生活することであるが、日常生活を続けながら行うという点で問題への気付きが早まり、効果的であるとされている。治療をするに当たりクリニックでは必ずクライアント自身の自己決定において行われることになっている。その背後には、どん底や死の経験のような「底つき体験」が存在し、それぞれが苦しみを抱えているといわれる。その苦しみに対してどうしようもなくなったときに自分を振り返るのではないだろうか。クライアントは1日をクリニックのスタッフや、他のクライアントと過ごすのであるがクライアントにとって生活そのものが治療であり、その中から気付きを得ることも多い。ミーティングと呼ばれる治療はその気付きを最も大切にしている治療法の一つであると言える。そこでは集団精神療法に基づいてグループ内での「言い放し、聞き放し」を基本として感じたこと、思ったことを話すのである。私も参加したが、

最初は何を話そうか考えながら話していた。慣れてくると聞いて欲しいことが次々にでてきて、不思議に感じた。その他にも音楽療法、作業療法、気功などさまざまなものがあるが頻度が最も高いのがミーティングであった。このことからミーティングが治療法として重要であることがわかる。ではセルフヘルプグループとの違いはどこにあるのかということ、治療者がいるかないかということである。ミーティングで治療者が1参加者として存在することにより、よりグループの存在が明らかになるとされる。ミーティングやクリニックに対しての意見を聞いてみたところ、「感謝している」などの肯定的な意見の他に「つまらない」「もう諦めた」などの意見も聞かれた。そのことについてスタッフの方の意見を聞いたところ、「クライアントの言葉を鵜呑みにしてはいけない、裏があることもある。だから日常の信頼関係が大切になってくる。」といわれた。私がいた約一ヶ月の間にも何度か問題があって、改めて人間関係の難しさを感じたし PSW (精神保健福祉士) の仕事の大変さに驚いたこともあった。しかし大切なのは、いかに人間らしく人とぶつかり合いながら生きていくか、人に接していくかではないだろうか。

4. 結論

クライアントにとってクリニック内での小さな出来事が回復につながりもするし、断酒継続中に飲んでしまうといったスリップにつながりもする。ミーティングにおいて他人の話を聞いて、過去の自分の人生を振り返ることによってアルコールによってバラバラになった人生のストーリーを組み立てることができるように、グループの力はどのようなにも作用するほど大きいものであると言える。アルコール依存症という病気について調べたときに、私はまず、自分の偏見の大きさに驚き、恥ずかしくなった。だらしない中年男性、意志が弱い、暴力を振るうなどのイメージでアルコール依存症を捉えていたからだ。社会の中では現在もこのような偏見が社会復帰の妨げになっている。しかし実際は、それぞれに苦しみを抱えて少し不器用に、その苦しみにから逃れようとした結果こうなっただけのことで誰にでもあり得ることではないだろうか。アルコール依存症という病気が人生や社会などのたくさんの背景を持ち、様々な要因が複雑に絡み合っている現実の問題を感じずにはいられないのである。